慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	党の領導と社会の自治のあいだ : 李暁東著『現代中国の省察 : 「百姓」社会の視点から』を読む
Sub Title	Thoughts on the dynamics between party's leadership and social's autonomy : reading Reflections on modern China : a perspective of "BaiXing" society by Xiaodong Li
Author	呉, 茂松(Wu, Maosong)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.14 (2021.) ,p.215 (8)- 222 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	長堀祐造教授退休記念号 書評
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20210331-0215

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

党の領導と社会の自治のあいだ
――李暁東著『現代中国の省察：「百姓」社会の視点から』を読む――

呉　茂松

【起】

著者からのご献本により、評者は本書に巡り合った。落掌の瞬間、「現代」、「百姓」、「省察」という語が並ぶタイトルに感銘を受けた。「一つの国家、一つの民族に束縛されない、一人の人間、『民』に立脚した平和的な価値を創生し、実現する」ことを政治学の研究に臨む出発点とする者として、評者はいつかはこんな本を書きたいと思っていた。昨今、中国において党の領導の範囲が拡大し、その力も強化されているなか、あえて「自治」を語り、それを立証しようとする著者の使命感がそのまま伝わり、一筋の希望も見えた。読んでいくうちに、次の二点に気がつく。一つ目は、私の力量ではこのような分量の本は書けない（『易』を含む古今東西の政治思想に対する著者の造詣に脱帽した）こと、二つ目は、著者は「歴史の中の思想」を研究するのではなく、「思想史の中の思想」を研究しており、その問題関心の射程はやはり現代にあったことである。評者は本書を研究書であると同時に、思想の書物だと位置づけたい。

これまで政治学をベースに現代中国の地域研究に携わってきた評者は、本稿の執筆を機に、思想史研究と地域研究、歴史と現代の対話を通じて、共通の命題を探し、議論の接点を持つことを試みたい。なお著者の問題意識と結論に、評者の視点と論点を加え、現代中国社会を

多角的に理解することの一助とし、最後に、ある問題提起をしたい。

本書の根底にある問題意識は「伝統中国という歴史的文脈のなかで中国の人々の政治観や法制度をめぐる認識、そして『自治』の歴史的特質を伝統中国との関連において構造的にとらえて、これらの性質をどのように現代にいかすことができるか」（27頁）である。「下層階層、百姓」の視点から、中国における「自治」と「公」の経路と性質を考察し、党の領導が強化されているなか、あえて「自治」の連続性と必要性を伝統という歴史的文脈から提起したことに、著者の勇気と本書の意義がある。評者は、中国における国家社会関係、官民関係、上下関係における「通」の必要性を内発的な自己変革に訴えることが、本書の主なメッセージであると理解する。これに対して、本書に欠けている論点を提起し、本書を補完することをもって、そして新しい議論を広げることをもって評者の責務を果たしたい。

本書を通読すると、中国において「生」きる民の「生」に対する意欲と知恵が力強く伝わる。著者いわく、その力はマグマのような存在である。「自治」論に強い関心を寄せながら読んでいくと、自治の実現に必要な「権利」概念が欠けていることに気付かされる。近代的な「権利」概念が中国社会に導入され、汎用され、すでに久しい。その権利を認識し、その権利の主体として生きる民・百姓の顔も描く必要もあるのではないか。自治を実現する主体として「民」は如何に登場し、権利を意識した民の投企性――つまり階級闘争の主役たる人民として、あるいは、有権者の予備軍たる市民としての未来に向けた潜在性、可能性――にまで、読者としては関心の射程が広がる。また、権利概念は著者が本書で言及している合法性、代表性、正当性の議論の前提となる近代的な価値であり、権利の主体としての民を論じることが中国特殊論を超えた、普遍論の対象としての中国を描く際の必要不可欠な論点ではないかと、評者は思う。現代中国社会において、権利が百姓の生きる動機ではないにしても、生を営む際（生存権を求める、その生存権が侵害された場合の自己主張を行う）の正当性基盤になっ

ていることは事実である。この概念を抜きにして、現代は語れないのではないかと、これまで現代中国社会における権利を巡る行為を研究対象としてきた評者としては特に気になる。

【承】

著者と評者の研究はいくつか類似点がある。国家・社会関係と「民」という視点を共有するし、また両者の潜在的な問題関心はともに立憲構想（憲政）にある。これまで、現代中国社会はいくつかの経路で議論の対象となった。大まかに列挙すると、強い国家と弱い社会の文脈で、文化大革命期の中国社会を論じる「動員と参加」の経路；大衆団体など国家との共生関係で、そのイニシアチブの取り合いと役割に着目するコーポラティズム的な「協働」の経路；国家への、公共領域への社会団体の自主性と役割を論じる市民社会論的な「参加」の経路；さらに、評者がこれまで扱ってきた権利拡張と権力制限を論じる社会運動論的な「緊張」関係の経路などである。そのなかで、伝統社会の「自律」論と同じ文脈で、現代社会の「自治」論を展開しようとしているのが本書の経路である。国家側が提起している既存の「自治」論（基層自治、村民自治、自治組織）とは異なる文脈での自治論である。

著者と評者の研究は交差するところがある。著者の場合は歴史から、思想から、現代を考察し、評者の場合は現代的な諸問題の歴史的、思想的文脈を探る。念頭においている現代的諸問題には、「憲政」、「市民」、「権利」などがある。両作業がタイミング的にクロスするところに、評者が著者の前著に学んだこと、著者が拙著を引用するということがあったと思われる。両者の研究は十分に融合可能である。著者の「己」から出発し、家、市、郷、社会へとつながるネットワークを中心とした「自治」論と、評者の権利意識とそれを巡る行為の議論を整合させることをもって、議論はつながる。

本稿のタイトルが「党の領導と社会の自治のあいだ」である。毛桂

榮の議論によれば、領導には「影響、支配、権限」の３つの内実があり、現代中国の政治言説においては、領導の中身が影響から支配、権限行使へと変遷したという。本稿では、領導を「上下（従属）関係における支配力と権限の行使」の意味合いで用いる。経済建設だけではなく、社会の建設を重視し始めた国家側は、党の領導を基底に置き、「管理」から「治理」へと社会政策の表現を変えている。その背景には、治理の主体の多元化、合議形式の重視、住民の参加を強調しようとする政府側の主導的な思惑がある。本書が提起する「自治」が、はたして今後に現れるのかは現段階で見切ることは困難である。だが、これまでの現代中国のダイナミズムを生んだ経済成長が一段落したあと、もう一つのダイナミズムの原動力は社会の変化にあると信じる評者はその社会の自治に期待したい。

【転】

評者はこれまで「自律的な社会による国家への浸透プロセス」を主題に改革・開放政策以後の変容する社会とその政治への影響について分析してきた。改革・開放以後、積極的な役割が注目されている「組織」と「制度」の関係に着目するコーポラティズム論と市民社会論ではなく、「行動」と「制度」の関係に焦点を当て、社会運動論の枠組みで議論を試みた。具体的には、権利を擁護することを意味する「維権」行為とその政治への影響について、社会調査を踏まえながら事例研究を重ねてきた。また近年、いくつかの種類の集団行動が見られる中、評者は利益と権利の主体として、生を営む民（個人ないし利益を共有する集団）たちの合理的、合法的目的を巡る諸行為を分析対象としてきた。つまり合法的な利益・権利が侵害されるあるいは合法的利益・権利を主張、要求する行為などがその対象となる。その主体が身分の共通性を特徴とする「階級」ではないことを付言しておく。評者が究明を試みた問いには、維権運動とはなにか、維権運動の政治への影響、維権運動に対する国家側の対応、現代中国史における維権運動

の位置づけなどがあった。維権運動の政治への影響がまさに本書が強調する国家と社会の「通」であり、維権運動の自発性は、本書が想定する内発性と気脈が通ずる。その意味で、著者の議論と評者の議論は接点を持つ。維権運動は、市場経済化の初期段階において先進国でもしばしば見られた不法行為の深刻化を刺激する要因として、80年代の制度化、法制化、意識の変化などの準備段階「胎動？」を経て、90年代のメディアの変化、ネット空間の拡大、公共知識人の登場、草の根NGO活動の展開、弁護士たちの活躍といった必要条件が整備されるとともに、90年代から2000年代にかけ、全国的範囲で散発的に現れた。管見の限り、その内実は人々の「民生に基づいた民権運動」である。知識人の介入、活動経験の蓄積によって徐々に「民主」という政治的な理念も芽生えるようになった。不法行為の深刻さと改善の必要性を認識した国家側も、「法をもって合法的な権利を擁護する」との理念のもと、権利言説を作り、諸制度作りも試みてきた。その意味で、2000年代は維権運動が台頭した時期であると同時に、国家による維権領域への参加、制度設計、維権観の解釈権と維権行為の主導権を確保しようとした時期であり、社会側の維権観と国家側の維権観が共存した時期でもあった。

2010年7月、「不法行為責任法」を制定した国家側は「維権運動」を民事適用範囲に限定した上で、そこからはみ出ていると解釈する維権運動に対して物理的な弾圧に乗り出し、「社会主義の核心的価値観」を軸に、「四つの基本原則」を盾に、社会側の維権観に対しアンチフレーミングを開始した。また維権活動を取り巻く環境、諸資源に対する統制を強化してきた。社会主義の特色のある工会維権モデルも打ち出し、党が領導し、政府が支持し、各部門が協力し、工会が運営し、労働者が参加する「社会化維権モデル」の構築を提唱し、推進している。90年代から2000年代かけて生成、発展してきた維権運動は重大局面に直面している。維権運動の行方、中国近現代史における維権運動の意義については、今後検討を加えたい。

【結】

このような中国の現状を踏まえ、評者は著者の問題意識に照らしながら、「結」に代えて、いくつかの論点を提起したい。まずは、近年一層強まっている一元的な指導思想、指導体制と、多元化しつつある社会との構造的な矛盾を如何に克服するのかという問題である。最新テクノロジーを掌握した党は中国社会を完全にコントロールすることは可能なのか。社会も党が押し付ける社会主義の核心の価値観を受容することが可能なのか。「デジタル・レーニン主義」を受け入れた人民たちは、良い秩序にいつまで安心、安住するのか。著者が本書で訴える官・民のあいだの「通」の必要性、その「通」を正当化する中国の伝統的な政治思想に「易」がある。本書も議論の出発点もその「易」である。中国においてこの構造的矛盾はどのような形で現れるのか。これは深刻な問題である。

次に、丸山眞男が提示した個人析出のパターンに照らした場合、自発的な結社要求の度合いが低く、政治的権威と距離を置く、利益の主体として「生」を生きる百姓の原子化傾向は、どう理解すべきなのか。はたして現代中国においても、岸本美緒が指摘する根源的に生きる個人、「方法論的な個人主義」が見られるのか。権力との依存と関連して、李妍焱が指摘する西洋に比べ自明な権利ではなく、「権威の獲得」から調達する市民社会の正当性の「権利論」ではない「効用論」からの脱却は可能なのか。

最後に、評者を含む知識人に課された挑戦でもあるが、本稿で最も投げかけた問いは、西洋と東洋の異同の立証を超え、如何に中国固有とされる同心円、連続性、曖昧さを打破するかである。伝統的な中国まで視野を入れた立証を通じて、著者は一つの結論――「中国では、自我を起点として、血縁と地縁関係を媒介に、家を中心に、郷、国へと同心円的に広がっていき一つの連続体としてのネットワークを形成するこのような連続性は『修身、斉家、治国、平天下』という知識人

に課せられた儒教的道徳と軌を一にしたものである。そして、このようなネットワークの中で、『私』と『公』との間は境界が曖昧である」（349頁）に至った。なるほど、中国は西洋と異なる中国独自の政治伝統と習慣があることは、評者の生活経験を踏まえてもよく理解できる。しかしながら、「中国は西洋と異なる道がある」ことを立証するだけでは、思索の自己満足とも見て取れ、物足りなさを感じる。知識人が解決すべき問題は、如何にその家を中心とし郷、国家へと広がる同心円を打破し、個人の修養、家、政治まで連なる「修身、斉家、治国、平天下」の連続性をぶち切り、さらに「私」と「公」の曖昧さの打開まで思索することこそが、近代知識人の課題だと思う。伝統的な思惟方式に対する即自同一性とも言えるこの現象に対する無自覚を、評者は問題として提起をしたい。個人を家から解放し、倫理と政治の乖離を実現しない限り、言い換えれば、これまで伝統的な思惟方式の経路とも言える「格物⇒致知⇒誠意⇒正心⇒修身⇒斉家⇒治国⇒平天下」の連続性から離脱しない限り、固有論、特殊論たる「中国の論理」の束縛から逃れない。「修身」と「斉家」を乖離しない限り、近代的な個人は生まれず、いつまでも儒教の「三綱五常」に埋没される「己」にしかならない。また倫理と政治の領域を分離しない限り、中国において「公共空間」は生まれない。修身と斉家の乖離、斉家と治国の分離にこそ、「公共」が生まれる空間がある。権利の主体たる個人、公共空間を育む社会、社会から正当性が調達される政府、それらの緊張関係に中国政治の長期的な安定があると、評者は考える。

個人主義、合理主義、自由主義を軸とする近代的な思惟様式の確立の経路を考える際に、一つの先例がある。丸山眞男が立証した「徂徠学」がそれである。丸山は「封建社会における正統的な世界像がどのように内面的に崩壊していたか」との問いのもと、徳川封建体制の崩壊の必然性を、思想的な側面から緻密に立証した。論考の対象は、日本思想の近代化のパターンとその特質の究明、儒教的（朱子学）世界観全体の構造的推移であった。藤原惺窩、林羅山、山鹿素行、貝原益

軒、伊藤仁斎、荻生徂徠、太宰春台、本居宣長（平田篤胤へ）たちの「道、理、気、性など」の理解、解釈と再構築を分析し、朱子学的な思惟方式の分解（時には『崩壊』、『純化』と丸山は表現している）過程を丁寧に論証した。儒教思想の自己分解過程と近代意識の芽生える過程を平行に論じながら、その根底にある思惟様式の微妙な変容を丹念に追い、「徂徠学」に投影することで、近代的な思惟方式を確立したのである。丸山の表現を借りれば、「…これまで辿ってきた規範と自然の連続的構成の分解過程は、徂徠学に至って規範（道）の公的＝政治的なものへまでの昇華によって、私的＝内面的生活の一切のリゴリズムよりの解放となって現れた」（丸山眞男、110頁）という。中国の現状を理解し、未来を創造する際に、日本の近代化の経験と教訓は、思考の補助線的な価値が充分あると、評者は考える。

【書評本】

李暁東『現代中国の省察――「百姓」社会の視点から』国際書院、2018年、387頁。

【参考文献】

丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1983年。
李暁東『近代中国の立憲構想――厳復・楊度・梁啓超と明治啓蒙思想』法政大学出版局、2005年。
岸本美緒『中国の歴史』ちくま学芸文庫、2015年。
李妍焱『下から構築される中国――「中国的市民社会」のリアリティ』明石書店、2018年。
呉茂松『現代中国の維権運動と国家』慶應義塾大学出版会、2014年。
毛桂榮「『領導』と『執政』：中国共産党の『指導』を巡って」『明治学院大学法学研究』101（下巻）：2016年10月、25-47頁。
津上俊哉「『デジタル・レーニン主義』で中国経済が世界最先端におどり出た」『現代ビジネス』ネット版2018年１月10日（https://gendai.ismedia.jp/articles/-/54087　2019年４月５日にアクセス）。